

流死産における父親の心理に関する文献検討

佐藤郁美¹⁾、下山博子²⁾

- 1) 竹田総合病院 周産母子室
- 2) 新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】流死産後の母親に関する研究は多数されてきているが、父親や夫婦関係などに焦点をあてた研究は少なく、そのケアに関する検討が課題となっている。本研究では、流死産を経験した父親に関する研究から父親の心理を明らかにし、父親への支援のあり方について考察した。

【方法】使用した学術論文データベースは、医学中央雑誌Web版である。2001年から2014年7月までの過去13年間の文献から、「流死産における父親の体験」あるいは「流死産における夫婦関係の変化」に関連のあるキーワードを入れて検索し、これらについて論じられ、入手可能であった7文献をレビューの対象とした。対象論文の内容から「子」「妻」「自分」「上の子供」「周りの家族」「医療者」「社会的(友人・会社)」を対象とした父親の体験と心理について、入院中と退院後に分けて、検討した。

【結果】「子」「妻」「自分」「上の子」「周りの家族」「医療者」「社会的(友人・会社)」を対象とした流死産後の父親の体験と心理について入院後と退院後に分けて、分類した。

1. 【子どもの死に衝撃を受ける】

子供の死の直後には、二重のショックを受け、我が子への罪悪感を抱いていた。また、悲しみから立ち直るために我が子の存在を忘れようとしたり、父親自身、我が子の死は自らが悪かったのではないかと自責の念を抱く姿も見られた。しかし、「死因と断定された臍帯部を自ら確認」から分かるように、死に衝撃を受けながらも、客観的な視点で児の死を見ようとする姿もみられた。

2. 【子どもを愛しく思い、労う】

「短い命だけど、良く頑張ってくれた」「かわいい子に会えてうれしい」から分かるように、我が子の死の直後から児に対して愛着を持ち、頑張りに対して労いの声かけをしていた。

3. 【自分の悲しみをこらえ妻の心身を案じる】

「身体痛めてる分、自分より辛いはず」「疲れたね」「自分を責めるな」から分かるように、父親は自身の悲しみより妻の悲しみの方が大きいと捉え、母親の心身をいたわる行動をとっていた。

4. 【自分の気持ちを抑え父親・夫としての役割を果たす】

児の死に驚き、ショックを受けている自分を自ら律し、子供を送り出すための諸々の手続きを引き受け、父親と夫の両方の役割を果たしていた。

5. 【社会に傷つけられながら生活を続ける】

周囲の人々が、父親よりも母親の体調を心配することから、悲しみを周囲に表出することなく、自身の中で折り合いをつけようと努めていた。

6. 【人間的な成長を遂げる】

我が子の死から、「いのちの大切さ」、「生きることの難しさ」、「自ら未来をより良い方向に切り拓くという生き方」、そして「温かな絆で結ばれる人々との繋がりを大切にすること」を学んでいた。

7. 【次の妊娠・出産への不安と期待】

同じ思いをしたくないという思いから、次の妊娠を拒み、次は無事に生まれるまで安心できない。一方、母親の身体をいたわりながら前向きに考える場合もあった。

8. 【夫婦関係のポジティブ・ネガティブ変化】

流産を契機として互いが一人の人間としての成長を遂げ、夫婦関係もより親密になるといったポジティブ変化と、希薄な悪い関係がさらに悪化し、中には夫婦間のコミュニケーションが断絶して離婚に至るといったネガティブな変化があった。

【考察】流死産は、父親にとっても大きな衝撃であり、悲嘆過程を辿っている。しかし、父親としての役割遂行のため悲嘆を十分に行えないまま社会に出ては傷つけられているため、流死産直後から夫婦を一単位として、ケアする必要があると考える。また、父親が児の死を受け入れ、前に進めるよう支援するためには、児が生きた証を残す思い出作りをすることも効果的であると考える。児の死に対する捉え方は男女で違いがあり、これを夫婦で共有した場合、夫婦関係はポジティブな方向へ進み、共有しなかった場合には、ネガティブな方向へ進む。よって、医療者が架け橋となって夫婦での面談を実施する必要があると考える。そして、退院時には、電話相談やセルフケアグループの紹介をすることも父親が十分に悲嘆過程を辿るために有効的であると考える。

本研究は、文献が少ないことから、検討内容に限界がある。今後、流死産を経験した父親を対象に、父親への支援がより充実するよう研究を進めていく必要がある。

【結論】流死産におけるケアは、夫婦を一単位として捉えることが重要であり、父親の心理を支えるためには、夫婦での面談や退院後の支援が必要である。

【参考文献】

- 1) 竹ノ上ケイ子ほか：自然流産後の女性の心理(2)一夫の反応、妊娠への思い、性生活への思いに焦点を当てて一、日本助産学会誌、14(2):5-17, 2001.
- 2) 北村恵美子ほか：妻が死産を経験した夫の言動の分析—助産録の主観的・客観的情報から—、母性衛生、32:14-16, 2001.
- 3) 井端美奈子ほか：父親(夫)の流死産体験、第33回日本看護学会論文集 母性看護、64-66, 2002.
- 4) 小林紗有香ほか：妊娠期における親意識と夫婦関係の変化に関する研究、第37回日本看護学会論文集 母性看護、119-121, 2007.
- 5) 今村美千代：死産・新生児死亡で子どもを亡くした父親の語り、日本助産師会誌、26:49-60, 2012.